

答辞

吹く風に春の訪れが感じられるこのよき日に、私たち卒業生のためにこのような卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。

振り返れば、同じ夢を持ち、期待と不安を胸に迎えた入学式が、昨日のことのよう思い出されます。

あっという間に過ぎた3年間の日々の中、新型コロナウイルス感染症の拡大により、学修の場が大きく変化し、戸惑うことも多くありました。

貴重な臨地実習では、終末期の患者様を受け持たせて頂きました。死に直面している患者様において、身体的な苦痛を緩和することも大切ですが、今まで生きてきた人生を振り返る「ライフレビュー」を行い、生きがいを見つけることで、その人が最後まで自分らしく、自分の人生を生き抜けるように支えることが看護としてとても重要であると学びました。人生に対して悲観的になっていた患者様が、受け持ち終了時に「僕も頑張るから、あなたも頑張るね」とこれからの人生に対して前向きになっている姿をみて、「自分の関わりが患者様の人生を支える一部になったのではないかと嬉しく思う反面、「もっと自分にできることがあったのではないかと自身の知識・技術の未熟さに悔し涙を流しました。このような経験を通し、多くのことを学び、成長することができ、入学時にはぼんやりとしていた看護師像がより明確なものとなりました。

新しく始まる生活では、困難に立ち向かわなければならないことも沢山あると思いますが、この3年間で学んだ経験を活かし、自分の目指す看護師像へと近づけるように看護を探究していきます。

感染拡大の中、実習をさせていただいた関連病院の方々、学内でより実践に近い学びができるように配慮して下さった先生方、家族の励ましに支えられ、今日を迎えることができました。これまで私たちの側で支えてくださった全ての皆様に、改めて卒業生一同、感謝申し上げますとともに、母校の発展を願い、卒業生を代表しての答辞とさせていただきます。